

# 災害時に備えて地域でできること

厚別東地区と青葉地区の  
取り組みから



厚別東地区社会福祉協議会  
会長 **中川喜久雄**さん



厚別東地区福祉のまち推進センター  
副運営委員長 **大戸 勇三**さん



厚別東地区福祉のまち推進センター  
事業部長 **菊地 邦夫**さん



青葉地区福祉のまち推進センター  
事務局長 **木野 恵司**さん



青葉地区民生委員児童委員協議会  
会長 **千葉 一晴**さん



青葉地区社会福祉協議会  
会長 **土田 義也**さん

## プライバシーよりも命が大切

「プライバシーよりも命」…厚別東地区の災害時支え合い活動プロジェクトのリーダー大戸勇三さん(86歳、厚別東高台町内会会長)は力を込めて言い切ります。

2010年、札幌市が災害時要援護者避難支援対策事業を進めるにあたり、厚別東地区はそのモデル地区に選ばれました。当時厚別東地区福まち運営委員長だった中川喜久雄さん(84歳、厚別東町内会連合会会長)は、日頃から「困ったときに支え合える雰囲気地域の中につくっていききたい。交流、防災、除雪などさまざまな取り組みを通じて、自然に絆が生まれることが大切。」と考えていました。モデル事業は単独の町内会での実施が基本でしたが、「7町内会すべてで取り組んで、より多くの成果を上げよう。」と決断。

そこで相談したのが、町内会連合会で福祉部長をしていた大戸さんでした。大戸さんは、現役の銀行員時代に町内会の会計監事を頼まれたことがきっかけで、地域活動を始めた理論派。

## 一軒一軒丁寧に説明

大戸さんは、同じ町連で防犯防災部長をしていた阿部義正さんとともに、事業工程を8つのステップに分け、7つの町内会の進捗状況を見ながら足並みを揃えて進めることにしました。初めは町内回覧で災害時に不安のある人を募る「手上げ方式」を採りました。ところが、町内会によっては

応募が全くないところがあり、その原因が「隣近所に迷惑をかけたくない」と遠慮する人や、プライバシー情報を提供することに抵抗のある人が多い。」ということに気づきました。そこで、民生委員と町内会役員が一軒一軒を訪問し、「プライバシーよりも命」を強調しながら顔を合わせてしっかりと説明し、話を聴くことで、1人ずつ支援の必要な人を把握していきました。

そうした努力の結果、2年後、全市で初めて防災福祉マップの完成をみることになります。新聞やテレビなどで大々的に取り上げられ、区内の町連だけでなく、市内他区からも視察が相次いだといいます。

## 日常の延長にある災害時支援

今年、防災福祉マップを7年ぶりに最新情報に改訂しました。その中心となったのが菊地邦夫さん(71歳、もみじ台通町内会会長)。町内会役員歴が30年以上という地域活動の大ベテランです。

昨年の胆振東部地震発生直後、もみじ台通町内会では菊地さんが拡声器を片手に安否確認をして回りました。停電でインターホンも通じない中、拡声器による呼び掛けが多くの人に安心感を与えました。「向こう三軒両隣。日頃の見守りも災害時の安否確認も、この意識があれば町内会の全世帯をすぐにカバーできます。」と菊地さん。

高校の教員をしていた頃から「和」を大切にしてきた中川さんは「厚別東地区では、町内会や福祉推進委員会がそれぞれ個性を活かした取り組みをしています。昨年の地震で経験したこと、取り組んだことを地区全体で情報共有することが大切。福まちがそれを担ってほしいと思います。」と、福まちによる地域全体への活動支援に期待しています。

## 震災時に活かした地域食堂

「和輪笑あおば」は青葉地区の住宅街の一角にあります。住民が手づくりで運営する地域食堂です。その運営に関わるのが青葉地区社会福祉協議会会長の土田義也さん(78歳、青葉町自治連合会会長)。

土田さんは高校教員だった頃から留学生の世話をし、退職後も国際ロータリーで活躍するほか、民生委員や町内会活動をしてきました。多彩な趣味も持ち、その一つが蕎麦打ち。自慢の蕎麦を「近所の皆さんにも振る舞いたい」と仲間が集まってできた「和輪笑あおば」は、毎週木曜日、蕎麦を楽しみながら地域住民が交流する場に。その収益は会員制の助け合いグループ「日常生活支援たすけ愛ふくろう(代表 澤出桃姫子さん)」の活動資金になっています。

昨年9月6日、胆振東部地震は木曜日の未明に起きました。蕎麦の材料を用意してあった土田さんらは、「地震でまともに食事をとっていない人もいるだろう。」と考え、炊き出しの形で地域住民に蕎麦を提供し、喜ばれました。

青葉地区民生委員児童委員協議会会長の千葉一晴さん(72歳)から、「民生委員が安否確認する中でも食事に困っている人はいた」ということを聞き、翌日には自治連でも豚汁とおにぎりの炊き出しを行うことにしました。

## 自ら気づいて災害への備えを

千葉さんは市役所を退職後、60歳で民生委員を引き受けて今年で12年。現職時代は福祉の経験は少なかったといいますが、今では地域福祉の要として活躍しています。「地震時の安否確認活動を通して、日頃の見守り活動に盲点があることがわかりました。停電や断水が起きると、

高齢世帯などでは自分たちだけでは解決できないことが一気に噴出します。」と千葉さん。「私たち住民が自ら気づいて、自らの意思で動くことが大切。住民同士が危機意識を共有して自主的に取り組まなければ」と話します。

## 福まちに求められる役割

青葉地区福まち事務局長の木野恵司さん(70歳)は、市役所に勤務していた頃、民生委員に関わる仕事をしてきた経験を買われ、今は自身が民生委員として活躍中です。

「地域の中には、自ら周りとの関係を断つ人もいます。そういう人は、避難所でもうまくなじめず、細心の配慮が必要。」という千葉さんの言葉を受け、木野さんは「福まちは、そうしたことも想定し、近くに住む人同士が顔見知りになれる関係づくりを進めることが役割だと思います。」といいます。20年以上続けてきた一人暮らし高齢者ふれあい交流会もその一つです。

今年福まち主催で水道記念館の見学会を実施。札幌の水道の仕組みや断水時の対応などについて学びました。震災の経験から食の確保の大切さを痛感した土田会長の要請を受け、「炊き出し訓練など、今後も災害を意識した取り組みを考えていきたい」と木野さんはいいます。

千葉さんは、「これからの時代は町内会や民生委員、福祉推進委員会などをつなぐ、福まちを超えるような大きな存在が必要かもしれない」と、結んでくださいました。

## 青葉地区福祉のまち推進センター

住所：厚別区青葉町4丁目 青葉ハーティケアセンター内  
(毎週月～金、10時～15時)  
電話：(011) 893-2055

## 厚別東地区福祉のまち推進センター

住所：厚別区厚別東4条4丁目 小野幌会館内  
(毎週月・水・金、9時30分～12時30分)  
電話：(011) 898-2805